

多系統萎縮症の認知機能評価

対象患者

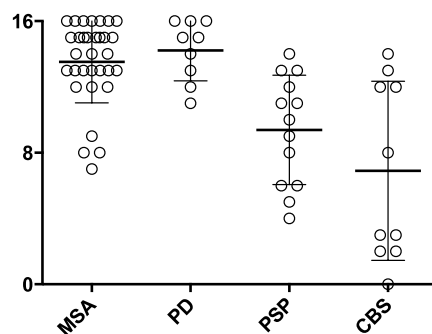
多系統萎縮症 (MSA) 32名 (MSA-C 23名、MSA-P 9名)
パーキンソン病 (PD) 9名
進行性核上性麻痺患者 (PSP) 13名
大脳皮質基底核症候群 (CBS) 10名

認知機能検査

Addenbrooke's Cognitive Examination Revised (ACE-R)
Japanese version of Montreal Cognitive Assessment (MoCA-J)
Mini-Mental State Examination (MMSE)

結果

1. ACE-R、MoCA-J、MMSEならびにACE-Rの3つの認知領域(注意/見当識、記憶、視空間認知)において、MSAとPSPあるいはCBS、PDとPSPあるいはCBSの患者群間に有意差あり ($p < 0.05$)、特に視空間認知において顕著である
2. MSA-CとMSA-Pでは各種検査に有意差なし
3. MSAでは年齢、罹病期間と各種検査の間に相関なし
4. MSAの罹病期間5年以上(11名)と5年未満(21名)では、各種検査に有意差なし



研究分担者: 武田篤

【目的】

多系統萎縮症患者の31%において認知機能障害がみられ、実行機能障害、記憶障害、視空間認知機能障害などが知られている。様々な認知機能検査を用いて、MSAの認知機能を評価し、他の神経変性疾患(パーキンソン病、進行性核上性麻痺患者、大脳皮質基底核症候群)と比較することによって、多系統萎縮症に特徴的な認知機能障害のパターンについて検討する。

【成果】

多系統萎縮症とタウオパチー(進行性核上性麻痺、大脳皮質基底核症候群)の認知機能障害は異なり、Addenbrooke's Cognitive Examination Revised (ACE-R)の視空間認知検査が両者の鑑別に有用であった。